

「探究に満ちた学校へ」 目指すべき学校像を具体化し、 校外を巻き込んだカリキュラムを設計

学校現場で
カリマネはどのように
取り組まれているか?

Challenge Report 2

富士市立高校（静岡・市立）

商業高校から総合型専門高校への大転換。新設校開設とほぼ同様の組織づくりやカリキュラム作成を、約2年間で日常業務と並行してこなしてきた、教員たちが経た道のりとは？

取材・文／長島佳子



探究学習の核となる「究タイム」の研究課題に取り組むために、町に出て社会問題の現場を体験中の生徒たち。



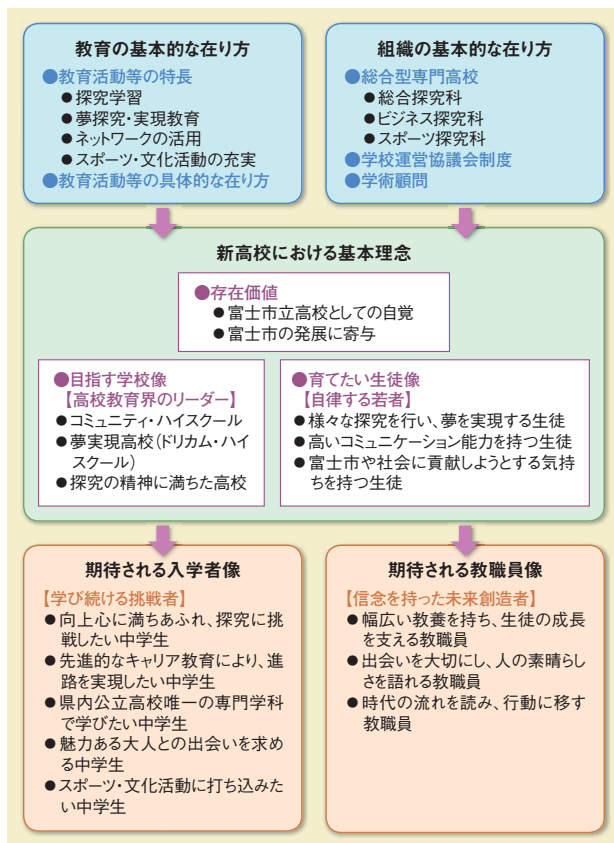
学校データ

1961年創立／総合探究科・ビジネス探究科・スポーツ探究科／生徒数707人（男子294人・女子413人、2016年11月1日現在）／進路状況（2015年度実績）大学84人・短大19人・専修81人・就職48人・その他4人

学ぶ目的意識の低さを 学校改編でどう解決するか

2011年に、自身の富士市立吉原商業高校から改編された富士市立高校。「コミュニティ・ハイスクール（C）」「ドリカム・ハイスクール（D）」「探究ハイスクール（I）」のCDIがコンセプトの総合型専門高校だ。設置している3つの学科名に「探究」の言葉を入れたり、修学旅行を「海外探究研修」と位置づけるなど、「探究」にフォーカスした特色ある取り組みを行っている。特に、総合的な学習の時間（以下…総学）に行

図1 富士市立高校「学校改革基本計画」で示されたこと
(2009年6月：開校2年前)



う課題解決型学習「究タイム」は、「探究」をカリキュラムとして徹底的に掘り下げた授業だ。

しかし、現場の教員たちが、富士市立高校開設の取り組みについて市からバトンを渡されたのは、開設のわずか2年前。吉原商業とインターバルなく開設する前提条件で、日常の学校業務と並行しながら、学科の再編からカリキュラム作成までこぎつけた。関わった誰もが「最初は無理だと思った」と語る学校改編の道のりについて、当時、開設準備室に所属し、現在も同校に勤務する4人の教職員に伺った。

— 自身の吉原商業高校は学区で唯一の市立高校かつ単独商業高校として、富士市の労働力の主力校と位置づけ



市立高校開設準備段階での会議資料。分厚いファイルが数十冊も残され、当時の議論の膨大さがうかがえる。

られていた。しかし、少子化・情報化・国際化という社会情勢の変化、国の教育改革など、教育環境が大きく動き出したなか、市立高校としての在り方を検討すべきという議論が始まった。

学校改編の幕開きは2005年、静岡県や富士市の有識者や吉原商業の同窓会を中心に「富士市立高校あり方懇話会」の設置に始まった。「市民の



総合探究科の海外探究研修で毎年訪問しているハーバード大学で、講義に参加する生徒たち。

財産」としての市立高校の「在り方」を検討するものだ。地域の中高一貫や教員の実践したアンケートなどから吉原商業の課題が浮き彫りとなった。「市民から遠い距離にあること」「市教委や市立中学との連携不足」「在校生が同校で学ぶ目的意識の希薄さ」などだ。これらの課題をもとに、2007年に現在のコンセプトのひとつ「コミュニティ・ハイスクール」の方向性が提言された。

この提言を受け、「富士市立高校改革基本構想」の策定委員会が新たに設置される。2008年3月に委員会から出された構想では、学校コンセプトに「ドリカム・ハイスクール(夢実現高校)」がプラスされ、学校再編の基本的な枠組みとして、「総合型高校が望まれる」とされていた。

段階的に学校像が具体化 「探究に満ちた学校」へ

この年の後半、構想の具体化が始まった。「富士市立高校開設準備委員会」が有識者と地域の教育関係者で設置され、準備委員会のメンバーと吉原商業の教員で「一緒に魅力ある市立高校を創る」グループワークが行われた。当時のことを総合探究科の平井延佳先生はこう振り返る。

「約1年間、放課後に集まってグループワークで様々な検討をしましたが、なかなか市教委の承認を得られませんでした。学科は商業を減らすことしか決まっておらず、普通科と商業科を半々

にするのか、それとも他の学科を設置するかなど、熱く語り合っていました」

当時の資料には、基本構想の育てたい生徒像素案への疑問や、「考えよ」という校訓の捉え方について、教員たちが葛藤しているメモも残されている。

スポーツ探究科の杉山秀幸先生は、「当時、学校コンセプトにはまだありませんでしたが『探究活動』という言葉は市教委から出ていました。体育科として、スポーツを題材とした探究は取り組みやすいと考え、課題解決型の授業を行うスポーツ科の設置を提案しました」と語る。

同校は1学年6クラス。従来すべて商業科だった編成に、普通科とスポーツ科を設置すると、商業科が半分以下になる可能性が高い。当然、商業系の教員からの反発もあった。

「当時のリーダーが『改革は現場の意見を全部聞いていたらできない』と英断してくださり、結果的に総合探究科(普通科)3、ビジネス探究科(商業科)2、スポーツ探究科(体育科)1の編成で決まりました(杉山先生)」

こうした取り組みを経て、2009年4月、改革の基本計画がまとめられた(図1)。

この段階でようやく「育てたい生徒像」や「目指すべき学校像」などが具体化されている。当時の議論について、当時は市教委の指導主事として開設に携わっていた現教頭の小杉哲也先生に振り返ってもらった。

「『育てたい生徒像』の検討に半年以上かかりました。当初は『学力10』の力を付けたいと議論されていました。『10』が社会で必要となる力です。その力をもった『自律する若者』を育てたい。前身校のアンケートで『入学後に頑張っていることが特になく』『生徒が4割近くいた課題から、自ら学ぶ喜びを見つけてほしい』と思いました。そこで出てきた言葉が『探究』だったので」

最終的に、学校コンセプトに「探究の精神に満ちた学校」がプラスされた。

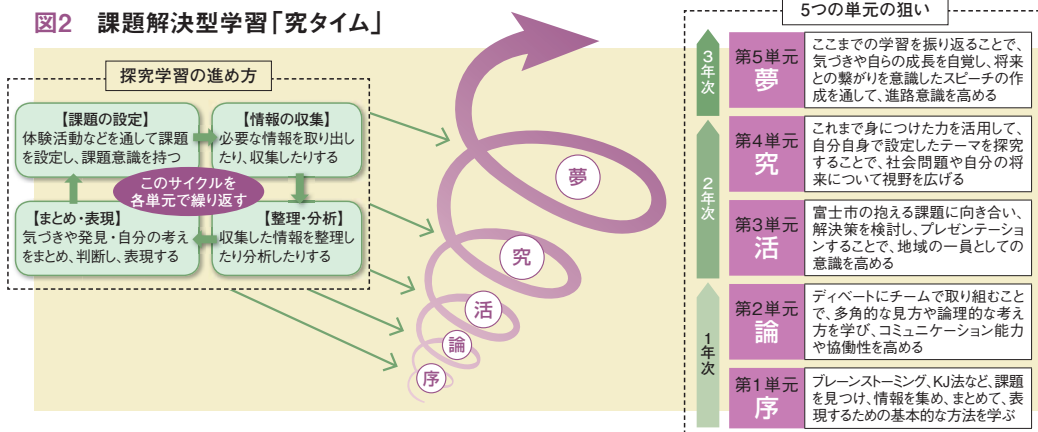
開校までわずか2年 探究学習をどう構築するか

そうしてよいよいよ、校内の組織やカリキュラムづくりを現場に任せられる新たなスタートを迎えた。市教委の開設準備担当の指導主事2名が、学校に常駐で配置されるという異例の体制でスタート。全教職員が3学科の検討委員会、5つのワーキンググループ(探究学習、教科指導、生活指導、学校運営、進路指導)に分かれ、中心メンバーで開設準備室を組織、具体化の準備を進めることになった。ここから教職員たちの真の悪戦苦闘が始まる。

「決まっているのは理念だけで、新学科が増えるのに具体的なことは何も決まっていない。正直、商業高校を閉じて2年間でつくるのは無理だと思いましたが(杉山先生)」

「探究」というコンセプトについても、それを授業カリキュラムにどう落としこ

図2 課題解決型学習「究タイム」



いか見当もつかなかった。「探究学習」とは具体的に何かを知るため、当時の指導主事がインターネット、他校事例、文献など手当たり次第に研究した。

「そのころ、『探究学習』を取り入れている学校が目立ってきたときでした。」



「究タイム」の期末に行う自己評価シート。生徒たちの気づきが、自分の言葉でびっしりと書き込まれている。



「究タイム」の1年次にディベートに取り組む。こうしたコミュニケーションの基本的スキルを身に付けることで、他教科の授業での学び合いや校外学習にも好影響を与えている。

そこで、開設準備室メンバーで全国の学校の視察に行きました（平井先生）

複数の学校の探究的な授業を見るうちに、探究学習にも様々なタイプがあることがわかってきた。深く掘り下げた探究もあれば、生徒に多様な体験をさせて幅を広げるような探究もある。

「熊本の鹿本高校を訪れた際、『生徒がこういう体験をすればこういう力が付く』と先生方は綿密に仕掛けをつ

けて授業をされていました。生徒たちは知らず知らずいろいろなチャレンジをしながら、課題に取り組み、自分たちの力を発揮していくのです。本校の生徒の伸ばしたい力に合っていると思ひ、真似しながら当校らしさが出る授業を開発することになりました」と語るの、当時、企画研究課で探究学習主任を務めていた、現・市教委（富士市立高校に常駐）の遠藤健指導主事だ。コミュニティ・ハイスクールを目指す同校は、地域連携でオリジナルのカリキュラムをつくらうと検討を始めた。

地域を巻き込んでできた 課題解決型学習の誕生

しかし、今までに校内の誰も経験したことのない探究的な授業をつくるには多くの紆余曲折が待ち受けていた。

「『探究なんてやる意味がない』『準備が大変』と、好ましく思わない教員もいました。新しいことを始めるときは反対する人もいますが、大半の人は中立派です。生徒の変化や効果を見れば、

仲間になってくれると確信していました」（平井先生）

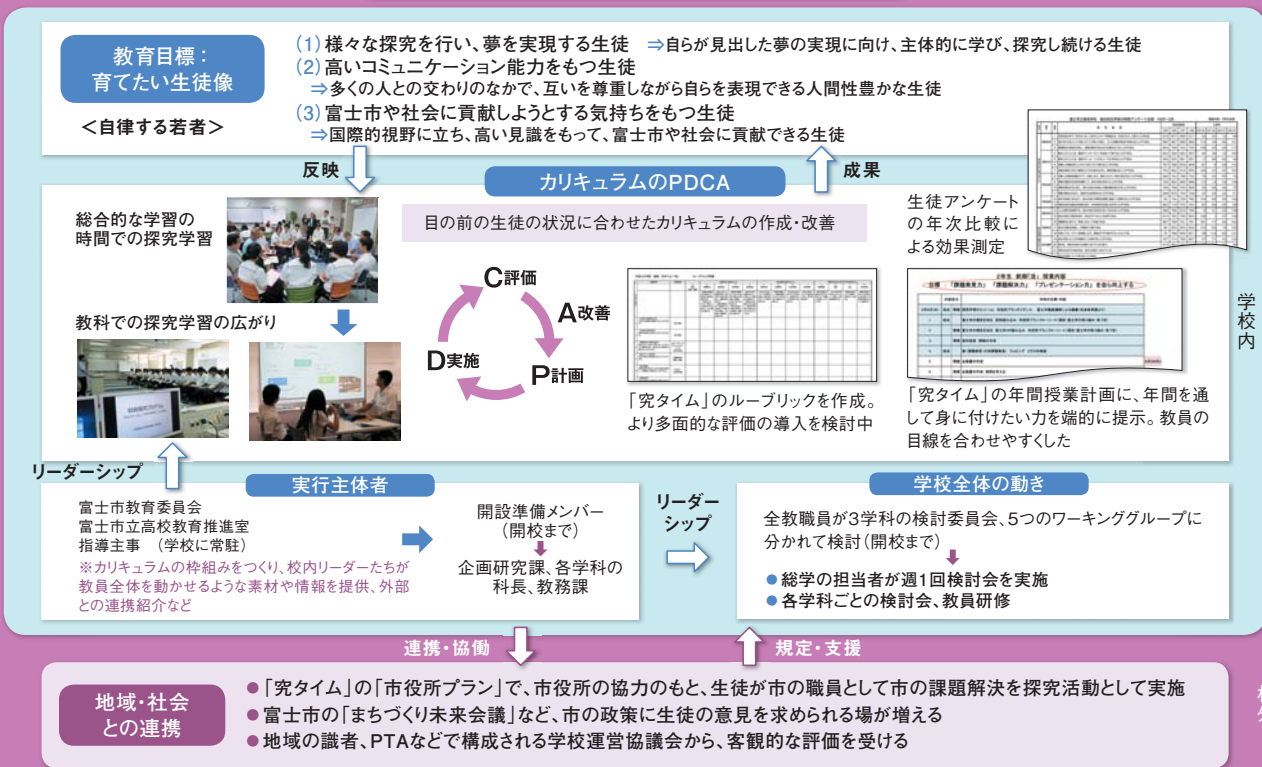
「最初は週1回の総学で始めることにしました。初年度は市立高校のカリキュラムを受ける生徒は1学年だけなので、総学の主担当+担任の2名体制を6クラスだけ始めればよい。全員ではないので『とりあえずやってみよう』と決めました（遠藤指導主事）

そして設定されたのが、課題解決型学習「究タイム」だ（図2）。1学年から3学年の前期までの2年半で5単元のカリキュラムを行う。なかでも2学年前期に行う「市役所プラン」では、生徒たちが富士市役所から辞令を受け、職員として生徒の視点で市の課題と向き合い、解決策を考える地域密着の体験型学習として注目された。

2011年の開校時、まずは「究タイム」で探究学習を始めてみて、2年目以降は各教科にも探究的な要素を落とし込み、個々の教員の発想で実践している。



「自分は総学の担当ではありませんでしたが良い授業だと思いました。課題を生徒たち自身が解決していく授業の発想は自分にはなかったので、探究を知らずに教員を続けていたらと今思うと怖くなります。それくらい『究タイム』を経験した生徒たちは『もっと新しいことを知りたい』という意欲がわいて、課題に取り組む思考回路が身に付いていくのを目の当たりにできています」（杉山先生）

富士市立高校のカリキュラム・マネジメントの概要



富士市立高校 開校前後の動向

(★が学校現場での取り組み)

2005年 11月	「富士市立高校あり方懇話会」設置	●富士市立吉原商業高校が「富士市立高校(以下「市立高校」)への改編が決定 ●メンバー:教育学の専門家、同窓会、地域の識者など ⇒今後のあり方を検討開始
2007年 3月	『魅力ある市立高校をめざして—富士市立コミュニティ・ハイ・スクール構想—』報告書作成	●地域の生徒・教員のアンケートや、時代・地域環境をもとにした提言 ⇒市立高校の方向性
2007年 8月	「富士市立高校改革基本構想策定委員会」設置	●市立高校の「基本的枠組み」「教育理念」「教育課程の基本的な考え方」の検討開始 ●メンバー:「あり方懇話会」の一部メンバー、市教委、学校管理職など
2008年 3月	『魅力ある市立高校をめざして—「夢実現高校(ドリカム・ハイスクール)」「コミュニティ・ハイスクール」』報告書作成 ⇒「探究学習」について言及	⇒学校理念、特色、基本的枠組み、教育課程の基本方針、運営方法などについての提言
2008年 7月	『富士市立高校改革基本構想』発表 「富士市立高校開設準備委員会」設置	●2011年の市立高校開設に向けての具体的なスケジュールを提示 ●基本構想の具体化計画 ●メンバー:学識経験者、中学校校長、市立高校教員、市教委など
2008年 9月	★吉原商業高校教員によるグループワーク	●現場教員による市立高校の具体的な構想の検討 ⇒学科再編の練り直し
2009年 4月	『富士市立高校改革基本計画』発表(図1) ⇒★現場の教員による、具体的なカリキュラム・マネジメントがスタート	⇒ビジョンの具体化 ●目指す学校像「夢実現高校(ドリカム・ハイスクール)」「コミュニティ・ハイスクール」に「探究の精神に満ちた高校」が追加
	★学校内に「富士市立高校開設準備室」設置 ★他県の先進校の視察、カリキュラム・マネジメントについての考察	●全教職員を3学科の検討委員会、5つのワーキンググループに編成 ⇒具体的な教育活動カリキュラム作成スタート ⇒「探究学習」について、市立高校に合ったカリキュラム開発に向けての調査、研究
2010年 4月	『富士市立高校改革実施計画』発表 ★企画研究課設置	⇒開校までに実施すべき個別計画の整理(開設準備委員会) ●振り返りの検証時期も計画に盛り込む ⇒探究学習を具体化するカリキュラム・課題解決型学習「究タイム」を策定 ⇒企画・調整をすべて取り仕切る校内分掌を設置
	★富士市立高校開校 ※最初の2年間は、吉原商業として入学した生徒と並行授業	課題解決型学習「究タイム」(総合的な学習の時間)を探究学習のカリキュラムとしてスタート(図2)
2011年 4月		
2012年 4月	★地域交流課設置	地域連携コーディネータの役割を担う校内分掌
2013年 3月	★富士市立高校として入学した生徒の初の卒業生を輩出 	⇒「究タイム」の振り返り(毎年)。 ⇒微調整しながらカリキュラムをブラッシュアップ
2016年 ～	★教科での探究学習の深化 ★ルーブリックの作成	●総合探究科の「社会探究β」や、ビジネス探究科の「総合実践」に探究学習がひろがる ⇒カリキュラムの内容、実施方法、評価方法の改善(随時)



スポーツ探究科
杉山秀幸先生



総合探究科
平井延佳先生



富士市教育委員会
指導主事
遠藤 健さん



教頭
小杉哲也先生

外部との多様な連携により
教員の探究意欲も高まる

他にも校外との連携活動を多様に
取り入れ、生徒たちに様々な大人たち
と接する機会を設けている。例えば、
総合探究科の「海外探究研修」では毎
年ハーバード大学を訪れている。現地の
学生との交流に備えて、日本文化を紹
介するプレゼンシートの作成や自己紹
介を、英語でできるよう準備してい
く。生徒たちは日常の探究学習でティ
トや発表のスキルを身に付けているた
め、カタコトの英語でも臆せず質問を
するという。この研修に当初否定的だ
った教員も、生徒たちの成長や、ハーバ

ードの講義を教員自身が経験できた
ことで、帰国後に「すごかった!」と興
奮して語っていたそうだ。
また、ビジネス探究科の「企業研究」
で一部上場企業を訪問したり、教科の
探究授業で官公庁と連携するカリキュ
ラムを組むことで、生徒のみならず教
員の知的好奇心も刺激し、探究学習へ
の意欲を高めている。
「生徒たちは環境を与えると、どんど
ん新しいことを身に付けて先に行きま
す。教員がついていく方が大変です」
(杉山先生)
「教員も初めてのことはかなりなので、
全教員対象のディベート研修など、ス
キルアップもはかっています」(平井先生)

探究力と学力の相乗効果を
狙った仕掛けが必要

同校が開校して6年目を迎えた。個
別の授業では毎年微調整を行っている
が、新高校全体での検証と改善段階に
入っている。総学を小中学校で経験し
ている生徒が多いことから、「究タイム」
でスキルを学ぶ最初の単元を圧縮し、
発想や思考の時間を増やしてレベルア
ップを図っている。また、開設時より総
学に関わる教員が増えたため、教員同
士の授業目標に対する共通認識を強
化。半年後、1年後、3年後にそれぞれ
生徒に何を身に付けさせたいかをシン
ブルに言語化して共有している。

探究学習で力を伸ばす生徒が増え
る一方で、新たな課題も見えてきた。
「『探究力(考える力)』が高い生徒と、
『知識(基礎学力)』の高い生徒が二層
化しています。海外探究研修に行っ
た生徒が英語に興味をもち始めたよ
うに、探究の力で基礎学力を上げられ
よう、相乗効果を狙った仕掛けが今後
は必要と考えています」(遠藤指導主事)
そのためには、探究学習を通じて生
徒に付けた力(多面的な評価)を檢
討。ルーブリックを作成中で、来年度か
らの導入を予定している。学校改編に
始まったカリキュラム・マネジメントを
学校運営の日常の流れに組み込んでい
る同校の今後に期待したい。